



信州川中島合戦 乾(部分)(当館蔵)

令和4(2022)年10月8日(土)~11月20日(日)

長野県立歴史館

千曲市屋代 260-6 Tel: (026) 274-2000 (代表)
<https://www.npmh.net/>



公式ホームページ



Twitter

開館時間：午前9時~午後5時（入館は午後4時半まで）
 休館日：月曜日（10/10は開館）、10/11（火）、11/4（金）

● 交通案内：長野自動車道「更埴IC」から車で5分。
 しのの鉄道「屋代駅」、「屋代高校前駅」から徒歩25分。

主催：長野県立歴史館

後援：信濃毎日新聞社、朝日新聞長野総局、読売新聞長野支局、毎日新聞長野支局、産経新聞長野支局、中日新聞社、長野市民新聞社、市民タイムス、市民新聞グループ、長野日報社、南信州新聞社、NHK長野放送局、SBC信越放送、NBS長野放送、TSBテレビ信州、abn長野朝日放送、(一社)長野県ケーブルテレビ協議会、FM長野、FMぜんこうじ、屋代有線放送電話農業協同組合、(公財)八十二文化財団

●観覧料

区分	企画展	企画展+常設展	常設展・講演会
一般	300 (200) 円	500 (400) 円	300 (200) 円
大学生	150 (100) 円	250 (200) 円	150 (100) 円

() 内は 20名以上の団体料金。

・高校生以下は無料です。

・障害者手帳(身体・精神・療養)の交付を受けている方と同伴の介護の方1名は無料です(手帳又は写しの提示が必要)。

・お得な年間パスポート(1,500円)も販売しています。

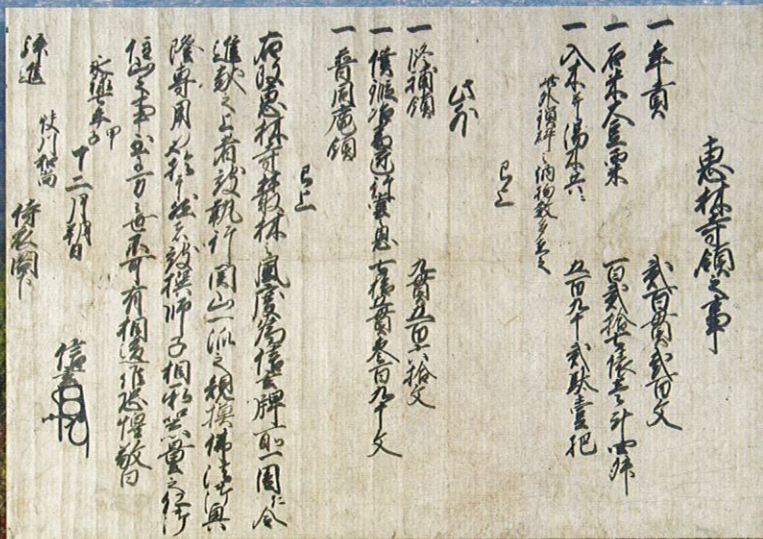
中世諏訪氏が統治し、諏訪大社によって信濃国一帯に影響力を持っていた諏訪、後に仏教徒として出家する武田信玄と諏訪信仰、自らを諏訪氏の後継者と意識していた武田勝頼の諏訪支配と諏訪信仰について展示をおこないます。諏訪地域は武田氏の権力も利用し、信仰とともに発展しました。また、武田氏も信仰心に篤いだけでなく神や仏の存在を巧みに利用しながら統治を進めていきました。



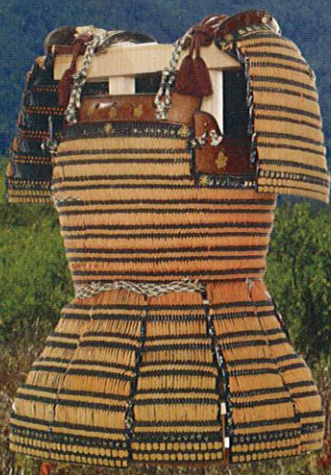
梵鐘
(小野神社蔵)



孫子の旗
(裂石山雲峰寺蔵)



武田信玄判物
(乾徳山恵林寺蔵・信玄公宝物館管理)



本小札紅糸威胴丸
(諏訪市博物館蔵)

関連展示

- 宮坂武男展 ～諏訪と武田氏に関する城郭鳥瞰図～
- 諏訪地域と武田氏関連神社仏閣写真展

関連イベント

- 講演会1 10月15日(土) 13:30～15:00
演題 「武田氏と諏訪信仰」
講師 長野県立歴史館特別館長 笹本正治
- 講演会2 11月12日(土) 13:30～15:00
演題 「中先代の乱と諏訪信仰について」
講師 静岡文化芸術大学教授 二本松康宏 氏
※ とともに定員80名、事前申し込み制(9月15日(木)から受付開始)

* 今後の状況により中止、延期、または人数制限等をおこなう場合があります。詳しくは当館公式サイトでご確認いただくか、お電話にてお問い合わせください。お問い合わせ Tel: (026) 274-3991 (総合情報課直通)



長野自動車道「更埴IC」から車で5分。
しなの鉄道「屋代駅」、「屋代高校前駅」から徒歩25分。

長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代 260-6 (科野の里歴史公園内)
Tel: (026) 274-2000 (代表) <https://www.npm.net/>



はじめに

今年は諏訪大社上社・下社において7年に1度の式年造営御柱祭が開催されました。新型コロナウイルスが猛威を振るう中、神社や地域のみなさんの工夫と努力により、無事各社に御柱が立ちました。例年県内外から注目される諏訪の御柱祭ですが、今年はひと際、人々の記憶に残るものになったのではないのでしょうか。

もともと諏訪の神がみとは水や風、石や木を司る自然の神がみであったと考えられています。その後、諏訪の神がみは神話と結びつき、上社は建御名方命、下社は八坂刀売命を祭神として現在に至っています。

諏訪社には「諏訪明神の依り代」である大祝と呼ばれる役職がありました。上社では諏訪氏が代々この役職を務め、「現人神」として信仰の中心となる立場でした。大祝となる儀式は、諏訪明神だけでなく、元来諏訪で祀られていた神がみとも一体化するものだったようです。神話由来の外來の神を祭神としながら、土着の神も排除せず融合していったところに諏訪信仰の特色があります。

中世以降の諏訪と武田氏



鉄鐸（諏訪大社上社蔵）

中先代の乱以降、それまで神職と領主を兼ねていた諏訪氏は、神職を司る大祝家と実質的な領主である惣領家に分裂します。しかし、宗教的な力だけでなく、実質的な諏訪の支配権力を得ようとした大祝家の諏訪継満は、下社の金刺氏や高遠諏訪氏を味方につけ、惣領家を滅ぼします。

その後、惣領家の生き残りである頼満は、金刺氏を甲斐（現在の山梨県）に追放し、高遠諏訪氏も屈服させるなど、積極的に領土拡大を目指し、「諏訪氏中興の祖」と呼ばれるようになりました。

その過程で大祝家を助けた甲斐の武田氏とも争うようになり、1528（享禄元）年には武田信虎と堺川（現在の長野県富士見町）で激突、兵力に勝る武田軍を息子の頼隆とともに破ったことが、御渡注進状（諏訪市博物館蔵）などに記されています。この戦のあと両氏は和睦するのですが、この時に神職である神長が和睦の証として鉄鐸（御宝鈴）を鳴らしたと言われています。本企画展では諏訪社の神事や契約の際に打ち鳴らされた諏訪大社上社の鉄鐸（複製）や矢彦神社の鐸鉢（さなぎほこ）を展示します。神がみへの祈りや誓いを込めて使われた宝物をぜひご覧ください。

武田氏の諏訪支配と信仰

境川の戦い以降、当主頼重は武田信虎の娘を妻に迎えて武田氏と結びつきを強めますが、信玄が武田家を継ぐと、関係は一変します。信玄は諏訪へ侵攻、諏訪頼重を滅ぼし、高遠諏訪氏も屈服させます。武田氏が信濃侵攻にあたってこれほど諏訪にこだわったのはなぜでしょうか。

現在、諏訪の御柱祭というと「諏訪地方の祭」というとらえ方が



孫子の旗・諏訪神号旗（雲峰寺蔵）

一般的ですが、古来より諏訪社の神事には信濃全域の住民や武士が関わっていました。祭事への人足や費用などの情報が諏訪へ集まっていたのです。下社春宮造宮帳（諏訪市博物館蔵）には、信濃各地へ出された1578～1579（天正6～7）年春宮造営のための代官や負担額の割り当てが記されています。当時の戦いは情報が命。信濃全域へと領土を拡大したい武田氏にとって諏訪に集まる各地の情報は大変貴重なものであったことが想像できます。信玄は諏訪へ侵攻する際に、100年ほど滞っていた諏訪社の御頭役（諏訪大社の祭事について割り振られた仕事）を復活させることを大義名分としました。また、諏訪氏の血を引く息子の勝頼に諏訪の名跡を継がせ、諏訪社の神職である守矢氏の跡継ぎに晴信の一字を与えるなど、諏訪の神事に介入していきました。

さらに、中世以降諏訪明神は戦の神として武士から篤い信仰を集めていました。諏訪＝武田の守護神とすることで、味方の士気を高めるとともに信濃の武士へのアピールにもなっていたと考えられます。武田氏の旗として有名な「孫子（風林火山）の旗」とともに、「諏訪神号旗」や信玄の兜に付けられていたと伝わる「諏訪明神像」（ともに雲峰寺蔵）からは戦における信玄と諏訪の結びつきを垣間見ることができます。このように、信濃へ侵攻し支配するためには、諏訪を押さえることが最優先事項だったわけです。

信玄は1573（天正元）年に没し、子の勝頼が跡を継ぎました。勝頼は辰野町宮木の諏訪神社を再興したり、塩尻市小野の小野神社へ「神勝頼」（神は諏訪上社の氏子であることを示



燗鐘（小野神社蔵）

す姓）の名で梵鐘を寄進したりするなど、諏訪の代表として諏訪社への関わりを続けますが、1582（天正10）年、織田・徳川との戦いに敗れ、武田氏は滅亡します。

その後の諏訪と武田氏



諏訪法性兜
（諏訪湖博物館・赤彦記念館蔵）

江戸時代以降も諏訪と武田氏のつながりは脈々と語り継がれていきました。上杉謙信と争った川中島の戦いは錦絵や屏風に描かれ、多くの作品で諏訪神号旗が見られます。また、信玄が使用したと伝えられている^{すわほっしょうのかぶと}諏訪法性兜は、浄瑠璃や歌舞伎の演目「本朝廿四孝」において重要なアイテムとして登場します。^{ほんちょうにじゅうしこう}

おわりに

この企画展は、中世諏訪氏が統治し、諏訪社によって信濃国一帯に影響力を持っていた諏訪地域について、信玄や自らを諏訪氏の後継者と意識していた勝頼の諏訪支配と諏訪信仰について展示します。武田氏の権力も利用しながら、信仰とともに発展してきた諏訪地域と、信仰心に篤いだけでなく神や仏の存在を巧みに利用しながら統治を進めていった武田氏とのかかわりについて知ること、中世における諏訪についてみなさんにあらためて考えていただける機会となれば幸いです。

（内城正登）